

「宮きよめ」

ヨハネの福音書 2章 12～25節

1. カペナウム

2:12 その後、イエスは母や兄弟たちや弟子たちといっしょに、カペナウムに下って行き、長い日数ではなかったが、そこに滞在された。

カナの婚礼のしるしの後、イエシュアは家族と弟子たちを引き

連れ、カペナウム、ヘブル語発音ではケファル・ナフーム(כפר נחום)という町に幾日が滞在されます。な



ぜカペナウムなのか、その意味をヘブル語から考えてみましょう。カペナウムはカーファル(כפר)塗る、なだめる、償う、贖う、赦す、という意味の動詞と、ナーハム(נחום)悲しむ、あわれむ、思い直す、恨みをはらす、慰める、という意味の動詞の二つからなると考えられ、この二つの動詞の語源となる箇所、すなわち聖書で初めて使われたのがノアの箱舟の出来事です。

一見カペナウムとノアの箱舟の結びつきを考えるのは強引なように思われますが、最初のしるしであったカナの婚礼が、天地創造と結びついていたと考えるならば、「その後」に表されることがノアの箱舟と関連づけられていたとしても不思議ではないと思います。ではまずカーファルから見てみましょう。

あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外とを木のやにで塗りなさい。(創世記 6:14)



地上の全ての生き物が死に絶えるほどの大洪水であったにも関わらず、全長 132m、全幅 22m、全高 13.2mの巨大な木造のノアの箱舟、その中にいたものが助かった理由、つまり箱舟が沈まなかった理由の一つがこの木のやにです。これが箱舟の内側と外側に隙間なく塗られる、カーファルされていたため、外からの浸水を遮断したためです。同様に私たち人間は、永遠の滅びを免れるためには罪がカーファルされる、すなわち償われる、贖われる、赦されることがなければなりません。ではカーファルされるとは実際にどのような状態を指すのかをヘブル文字から見てみましょう。



カフ(כ) … 手のひらを象った象形文字です。受け取る、捉える、適用する、という意味があります。

ペー(פ) … 口を象った象形文字です。言葉、食べる、分け前、という意味があります。

レーシュ(𐤋)…頭を象った象形文字です。かしら、思考、考え、を意味しています。

これらの意味を組み合わせると「御言葉を受け取り、考え、適用する」ことがカーファル、償われた、贖われた、赦された者の姿であると考えられます。次にナーハムを見てみましょう。

彼はその子をノアと名づけて言った。「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦労しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう。」(創世記 5:29)

苦労して働いた者に多くの報酬が与えられるという、これ以外の慰めがあるでしょうか。ノアとその家族は、神様の「御言葉を受け取り、考え、適用して」箱舟を造り、洪水に備えました。それは非常に多くの労苦を要求されるものであったと思われる。その結果、彼だけが慰め、ナーハムを受けました。ナーハムが示す慰めとは何かをヘブル文字から見てみましょう

ヌーン(𐤍)…魚を象った象形文字。規定、子孫、増加を意味している

ヘット(𐤇)…柵を象った象形文字。人の歩み、人生を意味している

メーム(𐤌)…水を象った象形文字。真理、永遠を意味している



これらの意味を組み合わせると「あなたとあなたの子孫は、神の真理という水の中に囲われて、永遠に生き、繁栄する」という慰め、ナーハムが与えられることを意味していると考えられます。

このように、カペナウムには罪の赦しと救われた者に与えられる神様のご計画が表されていると考えられます。そしてこのカペナウムの町に、イエシュアはご自身が「ついて来なさい」と言われた弟子たちはもちろんのこと、母と兄弟たちも連れて行っています。これにも大きな意味があると考えられます。

ところが、イエスは人々にこう答えられた。「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行かう人たちです。」(ルカ 8:21)

つまり「神のことばを聞いて行かう人たち」を連れてカペナウム、罪の赦しと慰めを受ける場所に入るとい、この 12 節は非常に短くシンプルで、一見ただの状況報告のように捉えてしまいがちですが、ここにも神様のご計画が記されていると信じます。しかしその滞在期間は「長い日数ではなかった」とありますから、これは神様のご計画の完成である御国が、この地に完成する前の一時的な滞在場所を指していると考えられます。使徒パウロはこの場所について「パラダイス」と呼んでこのように記しています。

Ⅱ コリント

12:2 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです、——第三の天にまで引き上げられました。

12:4 パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。

世間一般的に「天国」と呼ばれる場所が存在することは確かです。しかし神様のご計画は「御国が来ますように」、御国を「この地上」に建てることです。それがイエシュアが再びこの地上に帰って来られる「地上再臨」の目的であり、その帰って来られる場所がエルサレムです。それを表すかのように、続く 13 節にこうあります。

2. エルサレム

2:13 ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。



エルサレム、イェルーシャーライム(ירושלים)は、ヤーラシュ(ירוש)相続する、所有する、占領する、という意味の動詞と、シャーレーム(שלום)完全な、平和な、という意味の形容詞が組み合わさった言葉と考えられます。この二つの言葉の語源となる出来事は、どちらもアブラハムと関係があります。

創世記

15:3 さらに、アブラムは、「ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらないので、私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう」と申し上げた。

15:4 すると、主のことばが彼に臨み、こう仰せられた。「その者があなたの跡を継いではいならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」

15:5 そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

このようにヤーラシュという言葉は、アブラハムとその子孫を祝福するという神様のご計画の中から生まれた言葉であることが解ります。アブラハムとその子孫が祝福されることなくしてこの地上が祝福されることはありません。

主はアブラムに仰せられた。…地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創世記 12:1~3)

そしてこのアブラハムにその祝福を受ける人物がシャーレームの王、メルキゼデクです。固有名詞という形ですが、シャーレームという言葉が聖書で最初に使われる箇所がここです。

創世記

14:18 さて、シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。」

このシャレムの王メルキゼデクは、イエシュアを指し示す存在です。

イエスは私たちの先駆けとしてそこに入り、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となりました。

(ヘブル 6:20)

つまりシャーレームには、「王なるイエシュア」というメッセージが込められていると考えられます。このように、エルサレムという名前は、ヤーラシュに込められた「アブラハムとその子孫に対する神様のご計画」、そしてシャーレームに込められた「王なるイエシュア」この二つのメッセージを併せ持った名前であると考えられます。しかもこのイェルーシャーライム(יְרוּשָׁלַיִם)は、ヤーラシュ(יְרֵאִשׁוּ)とシャーレーム(שָׁלֵם)がシーン(ש)を共有する形で表記されています。このことにも意味があると考えられます。なぜならシーン(ש)は「神の形、体」という概念をもっているからです。つまりヤーラシュとシャーレームに込められたメッセージが「一体化」している、完全に一致していることを表していると考えられます。



またシャレムの王メルキゼデクは「パンとぶどう酒」をもってアブラハムを祝福しました。イエシュアが十字架にかかれる前夜、弟子たちに与えたパンとぶどう酒は過ぎ越しの祭りの食事の時でした。過ぎ越しの祭りとはエルサレム、この二つを並べて記したこのヨハネ 2:13 もまた、短い文章ながら非常に奥の深いメッセージを持った聖句と言えます。

過ぎ越しの祭りの起源は、出エジプトの時代、エジプトの奴隷となっていたアブラハムの子孫たち、すなわちイスラエル人たちを解放するため、神様ご自身がエジプトと戦われ、イスラエルの民を救い出されたことを記念して始められた祭りです。つまり神の戦いを意味する祭りなのです。その戦いを思わせる出来事が、次の 14 節以降に表されています。



3. 商売の家

2:14 そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、

2:15 細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、

2:16 また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」

宮の中を商売の家としていた者たちは「すわっていた」とあります。ここで使われているヘブル語は、ヤーシャヴ(יָשַׁב)で単に座ることだけでなく「定住、住みつく」ことをも意味する言葉です。商人たちは、神殿を

自分の所有地のようにしていたのです。彼らを追い出し、父の家を取り戻すためにイエシュアは立ち上がりま
す。ここに世の終りにエルサレムを取り戻し、御国をこの地に建てるために戦われるイエシュアの姿が、型と
して表されていると考えられます。

4. 細なわ

商人たちを追い出すためにイエシュアが手にしたものは、剣でも
杖でもなく細なわで作ったむちでした。この細なわと訳されてい
るヘヴェル(חֶבֶל)は、実はいわゆるなわ、縛ったり、結んだり物
を運んだりする時に使うなわではなく、物差しのように、大きさ
や広さを計る、測りなわのことです。つまりイエシュアは測りな
わを持って神殿に入られたのです。ゼカリヤ書にこのような預言
があります。



ゼカリヤ

2:1 私が目を上げて見ると、なんと、ひとりの人がいて、その手に一本の測り綱があった。

2:2 私がその人に、「あなたはどこへ行かれるのですか」と尋ねると、彼は答えた。「エルサレムを測りに行
く。その幅と長さがどれほどあるかを見るために。」

2:4 そして彼に言った。「走って行って、あの若者にこう告げなさい。『エルサレムは、その中の多くの人と
家畜のため、城壁のない町とされよう。』

測り綱を手にしたひとりの人、エルサレム、多くの人と家畜、イエシュアが神殿の中でなされた一連の行動は、
このゼカリヤ書 2 章の預言を想起させるものであったと考えられます。ユダヤ人たちは、神殿を商売の家に
したとイエシュアは言われました。ちなみにヘヴェルを動詞にするとハーヴァル(חָבַל)、訳すと「(腐敗した)



不正な行為をする」という意味になり、商人たちが公正な取り引
きをしていなかったことを意味しています。これを他の三つの福
音書では「強盗の巣」にしたと表現し、イエシュアの激しい怒り
が表されています。その結果、A.D70年にこの預言は成就します。
ローマによって城壁は破壊され、エルサレムは陥落し、ユダヤ人
たちは完全に国を失います。まさにイエシュアが神殿の商人たち
になされたように「追い出し、散らし、倒さ」れます。

しかしこのゼカリヤ書 2 章の預言はこれで終わりではありません。その結末はこうです。

ゼカリヤ

2:10 シオンの娘よ。喜び歌え。楽しめ。見よ。わたしは来て、あなたのただ中に住む。――主の御告げ――

2:11 その日、多くの国々が主につき、彼らはわたしの民となり、わたしはあなたのただ中に住む。あなた
は、万軍の主が私をあなたに遣わされたことを知ろう。

2:12 主は、聖なる地で、ユダに割り当て地を分け与え、エルサレムを再び選ばれる。」

シオンの娘、すなわちイスラエルのただ中に住まれるためにイエシュアが来られるその時、多くの国々の民がイエシュアに付き従いますが、その中でもやはりエルサレムが再び聖なる地として選ばれ、イスラエルの民がそこを所有することが預言されています。神様はアブラハムと交わした約束を必ず果たされます。しかし神様の御業はいつも「壊して建て直す、散らしてまた集める、殺してまた生かす、闇から光へ」です。

5. 家を思う熱心

2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。

これは詩篇 69 篇のダビデの歌です。

詩篇

69:9 それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしる人々のそしりが、私に降りかかったからです。

この詩篇 69 篇は、あなたの家、すなわち神の家を情熱的に、命がけで慕い求める作者の姿が描かれています。その姿は神様を信じない者たちにとっては狂気の沙汰でした。これはまさにイエシュアを表していると弟子たちは悟ったのです。そしてその家とはどんな家なのかがこの詩篇 69 篇の最後にはっきりと記されています。

詩篇

69:35 まことに神がシオンを救い、ユダの町々を建てられる。こうして彼らはそこに住み、そこを自分たちの所有とする。

69:36 主のしもべの子孫はその地を受け継ぎ、御名を愛する者たちはそこに住みつこう。

先ほどのゼカリヤ書 2 章の結末と同じ内容です。このように、イエシュアについて記されている記述は、細なわ一本、一見カッとなって暴れているように見える場面、まさに一挙手一投足、細部に至るまでどれをとってもすべて旧約聖書とつながっており、そこには必ず意味があります。そしてその意味はすべて神様のご計画を指し示しています。

6. 三日

2:18 そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか。」

2:19 イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」

2:20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」

2:21 しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。

2:22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。

イエシュアが十字架にかかれ、死んで三日目によみがえらされることと、神殿が建てられることを重ねるように表現されています。つまりイエシュアの死も復活もすべて神殿、すなわち神の家、御国を建て上げるためであることが言い表されているのです。そしてイエシュアの死と復活は、滅ぼされたイスラエル王国が、メシアであるイエシュアを王として完全に復活することを指し示しているのです。ですから重要なのは三日か四十六年かという話ではなく、「わたしは、それを建てよう」です。そしてあえて三日という意味を問うとすればそれは「復活」です。そして復活を表すためには前提条件として必ず一旦滅びること、死ぬことが必要です。つまりイエシュアは「わたしは、イスラエルを滅ぼし、復活させて神の家、御国を建てる」と宣言しておられるのです。

7. 知る

2:23 イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。

2:24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、

2:25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。

ここで注目していただきたい点は、イエシュアはすべての人をよく知っておられる、熟知しておられるということと、そして逆に私たち人間はイエシュアのことをよく知らないということです。たとえ信じていてもよく知らない、理解していない、理解しているように思っても実際は少しずれている、これは今日の私たちクリスチャンの姿でもあります。

人間にとって大切なのはイエシュアを信じ、そしてイエシュアを「知る」ことです。イエシュアに知らうことではありません。イエシュアを信じるなら、イエシュアはその人のすべてを知ってください。あとはその人がイエシュアを知るかどうかです。

人を知るには、その人が何を思い、何を考えているのかを知ることが重要です。この「イエシュアの宮きよめ」という出来事は、イエシュアの頭の中を垣間見るような出来事でした。すなわちこの御言葉に集約されます。

2:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。

イエシュアという人は父なる神の家、御国を思う情熱に食い尽くされている人なのです。頭の中は御国のことでいっぱい、もはやそのことしか考えられない、それ以外のことに1秒たりとも時間を使いたくない、そのような御方なのです。ですからイエシュアが私たちの祈りに耳を傾けてくださるのは、私たちが御国の国民だからです。決して私たちの豊かで快適で楽しいこの世での暮らしのためではないのです。つまりイエシュアを知るとは、御国を知ることと同じ意味を持っているのです。